



Photo : 勝連城跡 (局職員撮影)



琉球歴史漫歩

勝連城跡について

(表紙写真)

太平洋に突き出た勝連半島のつけ根に勝連城跡はあります。十四、五世紀に栄え、発掘調査では日本や中国のみならず、朝鮮、東南アジアの陶器などの文物がみられ、実際に勝連城が拠点となって海外貿易を行っていたようです。

阿麻和利が按司(地方の有力者)であったころ、沖縄の万葉集といわれる「おもろそうし」には

勝連わ 何にぎや 譬ゑる

(勝連は何にたとえようか)

大和の 鎌倉に 譬ゑる

(大和の鎌倉にたとえよう)

と歌われ、その繁栄ぶりを讃えています。

時の琉球国王は、その羅進を警戒し自分の娘を嫁がせたといわれています。結局、阿麻和利は、王府に滅ぼされ、勝連城も朽ちていきました。王府の正史には「逆臣」となっていますが、一方「おもろそうし」には「名高き阿麻和利 国の誇り」と阿麻和利を英雄として歌い上げています。

地元うるま市の中高生百人余りが熱演する現代版組踊「肝高の阿麻和利」では、疾風の如き情熱で歴史を駆け抜けたヒーローとして描かれています。

この沖縄版ミュージカルは、平成十二年三月初演以来、公演回数は百回を超え、観客動員七万人を達成しました。この活動は、子供たちの居場所作り、人材育成、地域づくりの場として県内外から注目を浴びています。

なお「きむたかホール」がこの活動の拠点となっていますが、このホールは、基地が集中して所在する地域住民の閉塞感を和らげること等を目的とした、いわゆる島田懇談会事業で整備されたものです。



防衛セミナー開催!

平成19年9月、防衛施設庁が廃止され、防衛省に統合されたことに伴って、那覇防衛施設局はこれまで果たして来た役割を受け継ぎつつ、更に、

防衛行政全般の地方拠点としての役割も担う沖縄防衛局に改編されました。

この役割を踏まえ、防衛に係る事柄について、県民の更なるご理解とご協力を得るため「防衛セミナー」を7月14日、那覇市のパレットくもじ市民劇場で開催しました。県民、地方自治体職員、自衛隊関係者など約220名のご参加を頂きました。今月号は、防衛セミナーについて、ご案内します。



私ども初めての試みではございますが、今回の防衛セミナーが防衛省、自衛隊に対する県民の皆様方のご理解の一助となれば、幸いだと思っております。

具体的には、陸上自衛隊の第一混成団の第一〇一飛行隊長、印口二佐から「自衛隊による緊急患者空輸」、古謝南城市長様から「自衛隊に何を求めるか」について、それぞれ講話をお願いしたところです。陸上自衛隊の部隊の側でどうしているのか、自衛隊の部隊がお世話になっている市町村の側でどのように見ているかということを紹介していただければありがたいと思っております。



真部局長挨拶

防衛セミナーのねらいとして、防衛省、自衛隊が特にこの沖縄において、

どのような活動を行っているのかを皆様方に知っていただく手がかかりを提供したいということです。

テーマ：自衛隊による緊急患者空輸

自衛隊は、医療施設に恵まれない離島などで、救急処置を必要とする患者が発生し要請がある場合は、災害派遣として、航空機で緊急患者空輸を行っています。

陸上自衛隊第一混成団第101飛行隊長の印口岳人二等陸佐から部隊の紹介と緊急患者空輸の現状及び課題などについて、写真やグラフを多用して、お話しいたしました。その内容の一端を紙上でご紹介いたします。



印口岳人 二等陸佐



航空機LR-1



ヘリコプターCH-47JA

緊急患者空輸は災害派遣の一環

- ・自衛隊が行う緊急患者空輸は、「災害派遣」として行われます。
- ・災害派遣は、都道府県知事等が災害に際して人命、財産を守るため必要と認めた場合、自衛隊の派遣を要請できます。

派遣要請を受諾する三つの原則

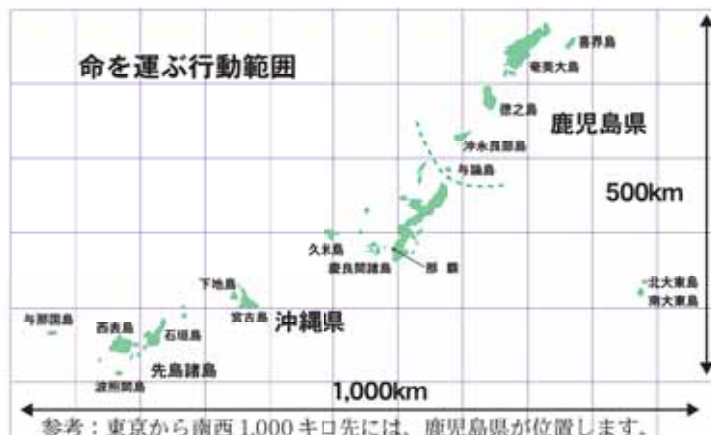
- ・公共性があること。私的な運用はありません。
- ・緊急性があること。生命とか財産に危機が迫っていること。
- ・非代替性であること。自衛隊の他に代わるものがない。手段がない。自衛隊の装備、技術、組織力を必要とすること。
- ・この三つをクリアして要請を受諾できます。

365日、24時間体勢で対応

- ・飛行隊には、輸送ヘリCH-47JAが2機、多用途ヘリUH-60JAが4機、連絡偵察機LR-1・LR-2各1機が配備され、那覇基地に展開しています。
- ・急患空輸の要請は、何時あるか分かりません。365日、何時でも飛び立てるよう2機の航空機と14名（飛行場待機10名・場外待機4名）が24時間態勢で対応しています。

緊急患者空輸の状況 7,488回の命のリレー

- ・昭和47年12月1日、米空軍から急患空輸任務を引き継いで以来、本日セミナー開催日の平成20年7月14日まで7,488回の急患空輸を行いました。
- ・今日も沖永良部島から2回、南大東島から1回急患を空輸してきたところです。
- ・過去10年の推移を見ますと230件から300件程度で推移していますが、ここ2年で件数が減ってきています。
- ・特に昨年度(19年度)は、ピーク時300件の6割程度で173件でした。
- ・これは、民間病院などでドクターヘリが運用されたことによるものと思われますが、ドクターヘリは、昼間に限って患者輸送を行うことから、その分、夜間の比率が増えています。
- ・なお、県別の件数の割合は、これまでに沖縄県が85%、鹿児島県(奄美大島以南)が15%という比率です。



参考：東京から南西1,000キロ先には、鹿児島県が位置します。

施設面での課題

- ・アプローチが難しいヘリポートや夜間設備がない空港などもあり、難しい環境での任務となります。
- ・南大東島や北大東島の空港には、夜間設備はありませんが、役場の職員がランタンを何十個も並べて、それを頼りに離発着します。
- ・着陸帯の移設や施設の整備などを自治体等においてしているところですが、日々の運用に際しては、注意喚起を行い、訓練をして任務に臨むようにしています。
- ・沖縄県では、離島便の運行の阻害になることや迷彩色のヘリコプターに抵抗のある方々に配慮されて訓練を認めてもらえないところが未だあります。任務を全うするためには訓練が必要なのだということを理解してもらおう今後も働きかけていきたいと思っています。

離島の方々にとっては、航空機というのは不可欠であり、命綱なのだと思う時があります。付き添いの方の「ありがとう」の一言にやりがいを感じています。これからもがんばって任務を遂行していきます。

医師の搭乗率 31%から95%へ

- ・5年前、医師の搭乗率は鹿児島県で100%でしたが、沖縄県は31%でした。
- ・鹿児島県では島の診療所に2名の医師がおり、現地から乗り込むことが出来ましたが、沖縄県では1名しかいないことから搭乗できなかったようです。
- ・現在では、那覇の病院の先生方が当番制で、那覇基地から搭乗して現地に赴くことから、医師の搭乗率は19年度には95%までになりました。

漆黒の闇の中を飛ぶ

- ・洋上の夜間飛行で月が出ていない場合、コックピットから見えるのは漆黒の闇だけです。基準となるものが全く見えないことから、一時的に平衡感覚を失う状態になることがあります。
- ・これを空間識失調といい、どんなベテランパイロットでも陥る可能性があります。陥った場合、相手が後輩でも操縦を任せることにしています。

変わりやすい気象

- ・沖縄は海洋性の亜熱帯気候で、気象の変化が早く、局地によって大きく状況が変わります。
- ・飛行経路が洋上であり、目的地も飛行場や駐屯地がない場合が多く、具体的な気象情報を得ることができないという不利な点があります。
- ・役場の当直の人に風景の写真を持ってもらい、写真の島が見えるか、岬に雲がかかっているか、などを聞きとり、雲がかかっていると云われれば雲が低いと判断します。
- ・あらゆる手段を講じて、できるだけ客観的な現地の情報を取って飛ぶようにしています。



古謝景春市長

テーマ..自衛隊に何を求めるか。

古謝景春南城市長から、自治体からみた緊急患者空輸や自衛隊に何を求めるかについて、ご講話頂きました。要約をご紹介します。

助かる命 久高島の住民が、仮に船が欠航した場合にどういった形で緊急の患者を輸送するかと、当時、知念村長時代に大変危惧をしていました。

その当時の第一混成団長とお会いする機会があって、住民の安心のためにヘリで急患の訓練をしてくれないかと話をしたところ、すぐに対応していただき、昼間一機、夜に一機を飛ばして訓練をしていただきました。夜間訓練では、うちぐわ広場という場所に、住民の車を集めてライトを照らして、着陸してもらいました。その時、住民は何を思ったか。我々船が出ない時は、もうおしまいだと思っていた。それを実際に運ぶ様子を見て安心をしたといっているのですね。助かるんだということに安心をしたといっておりました。

実際に、平成十七年に心筋梗塞で緊急輸送が必要になりました。その時は、台風が近づいて、船も航行できない。その中で自衛隊のヘリが出勤してくれました。午前中に出勤要請が出ましたけれど、天候が悪いので飛ばない。たまたま島に医師が残っていて、連絡を取りながら、悪天候の合間をぬって六時間後くらいに患者を運んでいくわけですが、もう、ちょっと遅れていたら危なかったのではないかと、ということをおっしゃっていただきました。助かった方はすごい感謝をいたしました。危険を顧みず難しい状況で人を助けるということは、大変敬服するところであります。

自衛隊に何を求めるか。 多様化する安全保障環境においては、色々なことが予想されますけれど、私どもが今、自衛隊に要望したいのは、二度とあのような悲惨な戦争を繰り返さないためにも、しっかりと沖縄戦の悲惨さの状況を知って、平和を希求するということを考えていただきたいながら、皆様にはがんばってもらいたいと考えております。

(セミナーの内容の一部を報道室で要約・とりまとめたものです。)

直言コーナー



沖縄タイムス
政経部記者
吉田 伸

スコアブックと双眼鏡を手に通った野球場では、高校球児の一挙手一投足に目をこらす。県内外の陸上競技場で見たサッカーは試合の流れによって目まぐるしく変わる選手のポジションチェンジを追いかけ、躍動感を紙面化した。今年三月、三年間在籍した運動部に別れを告げ、政経部の基地担当に就いた。

県庁を拠点に進める取材活動。生活のリズムによりやく慣れてきたが、取材そのものはまだまだ慣れず、戸惑うことはかりだ。

そんな中、沖縄防衛局の取材態勢に感じる違和感はぬぐえない。かつて社会部や宮古支局で行政取材を経験したが、市町村、県、国いずれの機関でも担当部署に直接取材してきた。

局では報道室の職員に回答を催促。職員は必至に提供しようと、担当部署とやりとりする様子が伝わり、感謝しているが、やはり合理的とはとても思えない。

本省や他の地方局では、そういった非効率性はないと耳にしたことがある。なぜ担当部署は直接、取材に応じないのか。聞けば「記者から質問が集中する際は業務ができず、ワンクッション置く。最近は、発表文に連絡先を添付、直接問い合わせられる態勢になってきた」とのこと。だが外部から見ると不可解さは消えない。

米軍基地と隣接して生活を営む住民が集中する県内。他都道府県より日米安保は身近だ。防衛は機密を含むだろうが、閉鎖的な情報の非開示は不信感につながる。沖縄防衛局の対応次第で、安保や波及するさまざまな議論が深まるだろう。積極的な情報発信に期待したい。

～ 沖縄防衛局移転式典 ～

当局は、本年4月、那覇市から嘉手納町の「嘉手納タウンセンター」に移転しました。同施設は、沖縄米軍基地所在市町村に関する懇談会（島田懇談会）で整備された施設です。



庁舎移転を記念して、7月26日(土)に移転式典が行われ、式典には、当局幹部職員の外、福井沖縄総合事務局長、仲里副知事(知事代理)、宮城嘉手納町長、スミス大佐(四軍調整官代理)、ケビン・メア在沖米国総領事、山川南西航空混成団長など関係機関の方々約100名がご出席されました。

記念式典では、真部局長から、「嘉手納飛行場に隣接し、防衛施設の実情を肌で感じる位置にあり、これまで以上に防衛施設に起因する地域住民の負担軽減に全力を尽くし、防衛の一端を担っていきたい」との挨拶がありました。

その後、沖縄県選出の国会議員の仲村正治様、県知事(仲里副知事による代読)、宮城嘉手納町長からお祝いのお言葉を頂きました。

式典終了後、関係機関の方々約150名のご出席を得、「嘉手納ロータリープラザ」において懇親会を開催しました。

懇親会では、来賓祝辞を沖縄県選出の国会議員の嘉数知賢様、安次富修様、下地幹郎様、照屋寛徳様、喜納昌吉様(挨拶順)から賜りました。来賓祝辞後、地元嘉手納町の皆様による古典舞踊やエイサー等が披露され、ご出席頂いた方々と当局職員との和やかな懇談のうちに懇親会を終了しました。



アスベスト(石綿)による健康被害に係る駐留軍等労働者の健康相談窓口について

アスベスト(石綿)による健康被害に係る駐留軍等労働者の健康相談窓口を開催しています。

1 開設場所:

- ・沖縄防衛局 労務管理官室
〒904-0295
嘉手納町字嘉手納290-9
TEL098-921-8131(内線607・609)
- ・独立行政法人駐留軍等労働者
労務管理機構那覇支部
〒901-2133
浦添市城間1985-1
TEL098-879-1027
- ・独立行政法人駐留軍等労働者
労務管理機構コザ支部
〒904-0023
沖縄市久保田3-5-10
TEL098-932-1093

2 対象者:

駐留軍等労働者及び在日米軍基地に勤務され退職された方等

3 相談の内容:

- アスベスト(石綿)に関すること
- ・ご自身の健康不良や健康不安に関すること
- ・労災補償制度及び健康管理手帳制度の説明など

4 相談時間:

9:30~17:00

(土、日曜日及び祝祭日を除く)